



評者

京都信用金庫  
理事長

増田 寿幸



### 『システム×デザイン思考で 世界を変える』

前野 隆司 編著

日経BP社 (14年3月)

1,944円 / 144ページ

## イノベーション創出のための実践的な方法論

早合点な金融関係者は、本書のタイトルをみて、コンピュータプログラムの本だと思われるかもしれない。本書は、企業経営の新しい手法を説く本であり、経営学の教科書である。したがって、副題は「イノベーションのつくり方」となっている。

慶應大学は、2008年に「慶應SDM」（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科）という新大学院を開設した。本書は、その慶應SDMの教授陣が共同で執筆したSDMの教科書であり、活動記録でもある。慶應SDMが開発したイノベーション創出のための新しい方法論を具体的に解説し、その学術的な背景、基本哲学を示すとともに、SDMがこれまでの5年間に企業（東芝、日本政策投資銀行、三菱重工など）の現実的な経営課題の解決に取り組んだ実例を詳述している。

金融関係者にとっては、創業支援の充実が喫緊の経営課題の一つになりつつあるなかで、日本政策投資銀行の大手町イノベーション・ハブにかかわるプロジェクトが大変に興味深い内容となっている。多様なアイデアをワークショップ等で議論し、事業化

に結びつけようという取組みだが、普通のワークショップをいくら繰り返してもビジネスに発展させることは至難の業だ。本書は、成功に導くためには、企業と外部の専門家やビジネスパートナー、一般の人たちを意図的に巻き込む「設計」が必要だと説いている。本書には書かれていないが、実際、日本政策投資銀行では、昨年4月からこの取組みがスタートしているという。

さて、私は数年前から、京都の取引先経営者や大学関係者などから、「ダイアログ」とか、「ワールドカフェ」（少人数に分かれて各テーブルで自由に対話を行い、ほかのテーブルとメンバーをシャッフルしながら議論を深めていく手法）などの言葉をたびたび聞かされてきた。若い人たちに交じって「ダイアログ・セッション」に参加させてもらったこともある。そこで展開される議論の多様性や新規性、あるいは共感を重視した合意形成方法に、新時代のコミュニケーションのあり方を感じさせられた。それで昨年から信用金庫の社内ですらダイアログ・セッションを呼びかけるようにもなった。そういう私にとって、本書は、本格的な実践テキストとして実に有益である。とくに巻末の33のQ&A集はまさに痒いところに手が届く内容だ。本書は「オープンイノベーション創出事業」の本格的で実践的なテキストなのである。

わが国においては、大規模災害の復興現場で市民ボランティア団体が活躍することが当たり前になりつつあり、大学を卒業しても企業に就職しないでNPO活動に積極的にかかわる若者が出てくるなど、社会のあちこちに、ある種の利他行動が目立つようになってきたと思う。そうした社会現象と本書はどこかで連関しているように思えてならない。著者の一人である保井俊之特別招聘教授も、休日を利用して無報酬のボランティアとして執筆に加わったという。SDMらしい話と思ったしだいである。

本書は「志の書」である。ぜひ読者諸兄に、ご一読いただきたい。